

豊岡市教育研修センターだより



豊岡市教育委員会 R3.8.30
豊岡市のホームページにもアップしています

No.5

教育フォーラム～非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに～

8月5日オンラインで開催された豊岡市教育フォーラムでは、2校のモデル校からの実践発表
他、嶋教育長の講話、苅宿教授の講義など、非認知能力向上について多くの学びがありました。

《西垣校長》～演劇ワークショップの子ども～
○決して強制されずやりたいことが自由にできる。
自分で考える、表現することを楽しんでいる。
○自己表出、気持ちを表に出す、アウトプットすることが低学年では必要だ。支援の要る子もたくましく活動していた。

《上野教諭》～演劇ワークショップの子ども～
○子どもたちは話し合いや発表を楽しんでいた。
○ファシリテーターにどんどんほめてもらい、自信がついた。見られる感覚が心地よさそうだ。
○人に伝えるため話し合いや折り合いをつける体験は人間関係を創っていく上でかなり大事だ。

《わたなべ氏》～演劇ワークショップの意義～
○アウトプットするには、一人一人が「内省」して「考える」ことが不可欠。表出する前に考える。一人一人が考える力が発揮しやすいのが演劇ワークショップだ。特にそのプロセスが大事だ。
○幼い時の演劇ワークショップはとてもよく覚えている。いろいろな感情の揺れ動きや発見があるのだろう。幼少期だから記憶されやすく定着しやすい。将来の価値観のベースになるのでは。



十月には、演劇ワークショップの授業を公開する予定です。

《嶋教育長講話》～豊岡市の教育と非認知能力～
○教科、道徳、総合的な学習の時間など全ての教育領域で非認知能力育成を掲げる。非認知能力の視点から見ると、授業はどうか、行事はどうか、いつも非認知能力の視点で見るということだ。
○その育成には、5つの徹底継続実践事項にも入っている「学び合いの授業」がポイントだ。先生からの情報だけでなく、360度いろんな友達から情報を得ているかが、学力につながってくる。他者からヒントをもらい、異なる考えを活かし、折り合いをつけてまとめていく。そういう授業をやっていききたい。

《苅宿教授》～検証・非認知能力の育て方～
○わたなべ氏のプログラムは大変良くできている。自分が決定し、責任を伴って、人に伝え、達成感を味わう好循環を生み出すプログラムだ。
○非認知能力の育成は乳幼児期の遊びが大きく影響する。遊びは「能動性の担保（やりたいことをやる、折り合いをつけて遊ぶ等）」があり、子どもが育つ要素が豊富だ。また異年齢での遊びが子どもを飛躍的に伸ばす。
○何かを創る活動など、大人が介入しない。任せて一人前に扱う。失敗しても子どもの責任でやり切らせる。これがやりぬく力につながる。
○「なってきた（自己省察）」⇔「なっていく（予見）」この伸び代を授業で経験させる。

各学校園で、2学期以降の授業や行事など全ての保育・教育活動で、「非認知能力育成」を意識して取り組み、子どもたちの非認知能力に働きかけ、少しずつ向上させていきましょう。